ISSN 0286-8229

University of the Ryukyus Library Bulletin. Vol. 26 No. 3 (No.100) Sept. 30 1993.

創刊100号記念号

目　次

〈特集〉「びぶりお」100号によせて
扁額「学而不厭」のこと …… 砂川恵伸 2
原石の研ぎ跡 …… 永盛　肇 4
創成期の木造館のこと …… 崎浜文枝 5
「沖縄書誌」三昧 …… 新城安善 6
琉大図書館の小さな思い出 ‥ 野原敏弘 6
"びぶりお" 編集の思い出 ‥ 松島寛正 7
退職後雑感 …… 山田　勉 8
附属図書館33年の思い出 …… 新井裕丈 8
保健学部図書室のころ …… 平　陽子 9
沖縄関係資料収集の思い出 ‥ 仲西盛秀 10
「琉球の風」の行く末 …… 宮里　愿 10
「琉球大学図書館」のこれから …… 前田正三 11
マクロビオティックということ …… 重松多喜造 12
図書館報雑感 …… 松浦　正 12
100号に寄せて …… 及川三千男 13
八月エイサー …… 橋本健一 14
ウマンチュの大学図書館へ ‥ 阿部雅機 14
二つの思い出 …… 宮城　健 15
較差是正費など …… 杉浦正輝 16
「びぶりお」100号によせて …… 伊江朝章 16
附属図書館と私 …… 幸地成憲 17
植樹の国際化 …… 木崎甲子郎 18
国連寄託図書館誘致の秘話 …… 瀬名波榮喜 19
館長を家庭教師にした男 …… 比嘉長徳 20
次なる発展をめざして …… 金子　豊 21
沖縄関係資料新着案内 …… 22
おしらせ …… 26
本学教官著作寄贈図書案内 …… 27
図書館事情 …… 27
医学部分館だより …… 28

〈特集〉「びぶりお」100号によせて

扁額「学而不厭」のこと

砂川恵伸

本学図書館正面階段の中央部に、我が国初のノーベル賞物理学者、湯川秀樹先生の筆による「学而不厭」の碑文があることは、琉大人ならば知らぬ者はいないであろう。その由来については、『琉球大学四十年』（1990年5月22日発行）の附属図書館の項に次のような記述がみられる。

「〈この〉碑文は昭和38年1月18日湯川秀樹博士が講演のため来学され、その折に揮毫された扁額より安次富長昭教授にレイアウトを依頼し、彫刻は県内産最上の石である久米島仲里村島尻の輝石安山岩を使用、沖縄大理石社に依頼して制作したもので昭和57年9月2日宮城健学長列席のもと除幕式が行われた。‥‥」

この説明は主として11年前（1982年）の碑文制作のことを述べたものであって、それまでのことについては、揮毫が30年前（1963年）だったことのほかは、ただ「扁額」の一語しかない。先生の書が扁額表装されてどこかに保存されてあったことは分かるが、それ以上のことは分からない。そこで、今回「びぶりお」100号記念号に執筆依頼を受けた機会に、扁額のことを少し調べてみようと思いたった。

私が扁額のことにこだわるのには実は次のような背景があった。多分それは一昨年のことだったと思うが、ある日図書館長室にお邪魔したことがある。入った途端、壁の扁額「学而不厭」が眼につき、私は思わず近寄ってじっくり見せていただいた。ところが意外にも、その扁額は原本ではなく、一見してコピーであることが明白だった。原本のことについては居合わせた館員達も即座には分からない様子だった。気にはなったが、私もその場はそれ以上立入って確かめないままに引きあげた。以来、扁額原本のことがずっと気にかかっていたという訳である。

さて、この碑文については、先の引用文のほかにも、幾つかの文章が書かれているが、碑の由来に触れたものとしては、安次富長昭「『学而不厭』－図書館玄関表札の制作にあたって－」（『びぶりお』Vol.15 No.5, 1982年12月1日）や『琉大風土記』（1990年，沖縄タイムス社刊，139-140頁）などがある。これらも刻碑制作の経過を中心にした文章であるが、扁額のことについても大事な記述がいくらか含まれている。このほか、当時の関係者の話、書簡、写真などをとおしてある程度のことが分かった。

前掲の安次富エッセーによれば、図書館正面の碑文は原本の文字を原寸の1.3倍に拡大し、字間余白も石のサイズにバランスをとって調整してあるという。扁額は碑よりも幾分小さいということになる。図書館長室の扁額を測ってみたら、紙のサイズが縦33.2センチ、横106.8センチ。半切を約30センチ短くしたサイズである。

『琉球大学四十年』には、湯川先生が慣れた筆さばきでこの句を今まさに揮毫中の模様が写真に収められている。傍で、当時の与那嶺松助学長と山田有功教育学部長が感嘆の面持ちで見入っているお姿もある。場所はあの当時首里キャンパスの本館内にあった会議室だ。写真には写っていないが、想像するに、その時写真の手前側にはカメラマンの他にも何人かの関係者がいたはずである。部局長会のメンバーとか事

務局の職員とか。

私は自身の体験から思うのだが、人前での揮毫は独りで部屋にこもって書くより何倍も難しいものである。気が散るうえに固くなってなかなかうまく行かない。普段の稽古に裏打ちされた自信とそれなりの場数をつんだ人でないと、書いても満足のいくものは出来ない。湯川先生が上の写真に見るような状況のなかで、こんな見事な作品を仕上げられたことから見て、先生が書についてもかなりのキャリアをおもちだったことは疑いがない。

そんなことを考えていたら、最近、友人の松村圭三氏（元本学事務局長）から、湯川先生の「学而不厭」の書が京都大学の湯川記念館にもあるということを聞いた。やはり、先生がこの句を日頃から愛用し、何度も書きこんでおられたことは間違いないと考えてよさそうである。ただ、琉大に残されたこの書にはもともと落款印がなかったとのことであるが、それはおそらく旅先で予定外のことだったためにお手許に印を携えておられなかったからであろう。

現在、図書館長室にかかっている扁額にはちゃんと印が押してあるが、これはその後刻碑制作の際に未亡人の湯川スミ夫人にお願いして押していただいたものである。揮毫の後約20年も経ってから落款印が施されたというのも珍しいことである。この辺のことは、前掲の安次富エッセーや『琉大風土記』にも書かれているが、少し補足すると、当時の木崎甲子郎図書館長と湯川スミ夫人との間の往復書簡が今も図書館に保存されていて、湯川夫人のお手紙のなかに、「‥‥よく主人が他の額にも押していましたように、最初と名前の下と二ケ所に印を押しまして昨日運送屋に渡しました。‥‥」という下りがある。「最初」というのは書の右肩に押されている遊印のことである。先生がかなりの書歴をお持ちだったことは上に傍点を施した文面からも明らかである。さて、揮毫の後、この書は早速扁額装され、志喜屋記念図書館内の正面玄関ホールでカウンター背後の壁面に掲げられ、教職員、学生の学習の励みとなってきた。1981年に千原キャンパスの現図書館が竣工し首里から移転してきた後は、図書館長室に掲げられて現在に至っている。しかし、現在そこにかかっているのは、先ほど述べたように、複本である。原本は一体どこに行ってしまったのか。

気にかかっていたこのことも、幸いに今回の調査で判明した。図書館の金庫の中に大事に保管されていたのである。私ははやる気持ちを抑えながら早速見せて貰ったが、またも意表をつかれた。現れ出たのは扁額ではなく、桐箱に収まった巻軸だったからである。開いて見ると紛れもない「学而不厭」の原本である。二十年もの間、扁額で掛かっていたせいでかなり日焼けしているものの、墨痕はいまだに鮮やかだ。見ていると湯川先生の息遣いが伝わってくるような感じさえする。力強く凜としたなかにも慎ましやかな気品が漂う。技量的にも見事な書幅である。

扁額のままだと傷みが進むため、扁額は複本にし、原本は巻軸にして永久保存することにしたということである。誠に行き届いた配慮であり、今更ながらプロ集団である図書館の仕事振りに脱帽した。と同時に100号を数える「びぶりお」の発行についてもやはりプロの根性を見る思いがするのである。このようなプロ意識が息づいているかぎり、琉大図書館健在なりの感を深くしつつ、本記念号の発行を慶んでいる次第である。

（すながわ　けいしん：琉球大学長）

原石（はるいし）の研ぎ跡

永盛　肇

現代はコンピューターの世の中です。これが無ければ夜も日も明けません。やれ資料だ、記録だ、やれデータ・ベースだと、まさに狂乱じみた毎日です。しかし、このようなハード・ウエアのなかった大昔にも、文字ならぬ人間の生きた証しがプリントされていたのです。

沖縄に来て10年余になりますが、この間に趣味・道楽？で採拓した碑文が、大分溜りました。内容も、歴史的な意味合いの濃いものから、琉球王を始めとする貴人の遺徳を顕彰する記念碑や、果ては墓碑銘に至るまでさまざまです。

先日、梅雨明けの日差しの強い日曜日に、虫干しをしようと久し振りに拓本の束を広げてみました。申すまでもなく当地はヒィーラーの天国。この種の紙類は彼らの好餌ですから点検を怠るとやられます。

果たせるかな、何枚かが食害を被っていました。しかし、相手が相手だけに、どうにもなりません。一枚一枚と看ていくうちに、高さ30センチ幅15センチ程の細長く四角い小さなものが出てきました。いわゆる原石（はるいし）です。これは、知花で或る碑文を採った帰りに、近道をして雑木のヤブを横切ったとき、つまずいて偶然にみつけた原石の拓本です。「四ゑ」と縦に二文字だけ刻まれた粗末な石杭に過ぎません。いつごろのものかはっきりしませんでしたが、後で調べたところ、どうやら蔡温（1682－1761）の検地以後に、田畑や山林・原野の区画整理のための目印として立てられたもののようです。

それだけならば、別に何の変哲もありませんが、この石の稜角は大きく磨り減って、丸く凹んでいたのです。これは、紛れもなく刃物を研いだために磨り減った痕（あと）跡です。恐らく鎌か鉈でも研いだのでしょう。しかし、私も百姓の出だからよく分かるのですが、固い自然石が丸く凹むまで磨り減るには、よほど長い年月にわたって何回も研がなければ、こうはなりません。

これまで、洋の東西を問わず、いつの時代にあっても、史録（データ）というものは、時の支配者または権力者の手に成ると相場はきまっていて、アウトサイダー、ことに農民などは彼らにとって虫けら同然であってみれば、農民側の史録などというものはほとんど残り得ませんでした。その意味からすると、この原石の研跡は、いみじくも過酷な労働に耐え抜き続けた物言えぬ農民の生きざまが間接的に投影された貴重な証しの一部、つまり庶民の生きたデータの片鱗とみることができるのではないでしょうか。

（ながもり　はじめ：附属図書館長）

首里時代のキャンパス全景

創成期の木造館のこと

崎浜文枝

戦後間もなく創設された琉球大学附属図書館の1953～54年頃のことである。下駄箱より溢れた履物（多くはゴム草履であった）で混雑を極めていた図書館入り口の光景が昨日のように頭を過ぎる。

木造平屋建て76坪の図書館は56席の一般閲覧席、12席の特別閲覧席を持っていた。

一日の入館者数、凡そ370名、朝8時30分の開館早々より満席になり、図書館入口一面、足の踏場もないほどの混雑を極めていた。学生達はそれらの履物を飛び石代りに飛び越え飛び越え入館する有様であった。勿論、入館はできても席に坐れる保証もなく書架の間や壁に凭れて立読みする学生、僅かなスペースの床に坐り込んで活字を追う学生などなど。室外に溢れ出た学生は、「コ」の字型の図書館中庭を閲覧室代りとし、芝生に腰を降ろし読書に余念がなかったものである。

学生総数五百有余名の内、大半の学生が活字を、情報を求めて図書館へ図書館へと足を運んだことになる。資料の乏しい当時、図書館へそれを求めたのは勿論であるが、琉大図書館の建物は当時としては立派なものであった。

沖縄独得の赤瓦の屋根をもつ木造の本建築、内部は白壁に大きな窓が方々に開かれ、採光、通風とも申し分ない環境であった。床は素足に心地よい感触をもたらす木目のしっかりしたフローリング、赤瓦が陽光に映え、木造でありながらモダンな感じを与えていた。

焼野原から立ち上がった間もない時代である。故郷を追われ戦火を逃れた人々が、漸く許可された地域に戻り落ち着き始めた頃のこと。天幕張り、トタン葺きの多い中にあって、首里城跡の高台に聳え立つように建てられた図書館は、いやがうえにも立派に見えたのは当時としては無理からぬことである。

学生の大半がこの居心地の良い図書館を講義以外の時間に当てたのであろう。吹き抜けるさわやかな心地よい風に浸りながら過すひとときは、学生達の活力を蓄える楽園ともなったのであろうか。

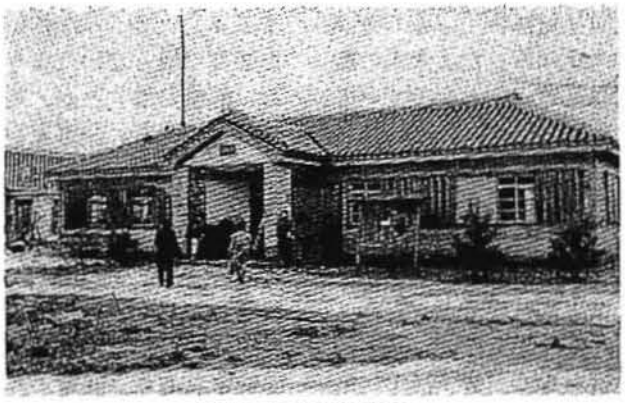
夜間は職員の努力で深夜おそくまで開館され、ここばかりは不夜城の観を呈していた。高台に煌々と点る明りは遥か遠くの地域よりも望まれ、多くの人々の語り草となった。

琉大図書館のこの明りは、私達にも何か希望のようなものをかき立てる光であったようにも思う。

こうして、戦後灰塵の中より力強く立ち上がり、学び巣立っていった学生達は、現在琉大の教官をはじめとし沖縄の各界で活躍されている。

先達って、すっかり復旧された首里城を訪れたが、創成期の図書館が幻のごとく浮び、当時の学生達の熱い息吹を感じる思いであった。

（さきはま　ふみえ：元受入係長）



創設時の附属図書館

「沖縄書誌」三昧

新城安善

あれこれ三十年前の首里キャンパス時代の憶い出の一端である。琉大の機構改革にともない、図書館の事務組織に一部改組があり、「参考司書」が新設されたのが、1964年10月1日であった。参考業務及び書誌作成、図書館の利用指導、資料の収集計画等が主要なものであったが、特殊的な業務としてアジア財団援助でハワイ大学との沖縄資料の交換業務(1964.11)、図書館報「びぶりお」の創刊(1967.5)、琉球政府立中央図書館（現在の沖縄県立図書館）東恩納寛惇文庫資料の目録作成協力(1965.8)、琉球大学郷土資料目録（改訂増補版）の刊行(1966.6)など図書館全体の意志で遂行されたことなどが強く印象にのこっている。とりわけ「びぶりお」創刊以来、紆余曲折ながら第21号(1972.4)までは、私の参考司書当時の産物である。

「びぶりお」の編集刊行の経費もままならなかったこともあって、手書きや和文タイプ版の原紙を作成し印刷する工程であった。

千原キャンパスへの移転記念のモニュメントになった沖縄関係資料目録（増加版）の刊行(1981.3)前後のころから、私の「書誌」三昧がはじまる。「びぶりお」とのかかわりのなかで、憶い出されるのは、「沖縄研究史」書誌稿を掲載させてもらったことである。ひろい視野から沖縄資料のありようをつぶさにみてきたこともあって、大きな興味と関心を寄せたのは－沖縄研究史－その動向（経過・現状）及び評価（課題・展望）等について、その道の研究者の書いた重要なドキュメントを拾い集めたことが、そもそものはじまりであった。第47号(1980.9)から第50号(1981.4)まで各分野別に連載したが、"‥‥沖縄研究を志向する者にとって、好個の促進剤的な役割をもつ参考資料になるであろう"と記しておいたが、はたしてそのドキュメントに注目し利用してくれた者はどれだけ居たことであろう。

（しんじょう　あんぜん：元整理係長）

琉大図書館の小さな思い出

野原敏弘

ぼくは、琉大の一期生であるから、図書館の創立当初の利用者ということになる。

沖縄戦で破壊された首里城跡はすっかり荒廃してしまって、そこに大学は建った。米軍の艦砲射撃でくずれた城壁は瓦礫の山となっていて、草でおおわれており、そこに、学生たちが校舎へ通うために歩いた小道ができていて、誰が名づけたか、学生たちは、その坂を「下駄割り坂」と呼んでいた。

その頃、那覇には書店はなく、貸し本屋が一軒あるだけであった。学生たちは、大きな夢と希望を持って入学してきた者たちばかりであったが、図書を購入する道もなく、皆、活字に飢えていた。

校舎は木造瓦葺きの平屋で、一棟が二教室に仕切られており、そのうちの一教室が図書室になっていた。

一人の学生が、「おい、図書室があったよ」と言って、本をかかえて明るい笑顔で入ってきた。何人もの学生たちが石ころだらけの中庭をつっ切って、図書室を目指して歩いた。書架は、米軍政府から贈与されたであろう「デモクラシイ云々」とか、「民主々義云々」といったような図書で埋っていたように記憶している。ぼくも、何冊か借りたが、遂に一頁も読むことはなかった。ただ、図書室があるということだけで、かすかな希望を持ったに過ぎなかった。質・量ともに大学図書館としての機能は全く果たしていなかった。

間もなく、その教室図書館から木造瓦葺き平屋建ての独立した建物に図書館は移転して開館した。館内にはカウンターが設置されており、閲覧室もあり、閲覧テーブルも三つほど置かれた。カウンターには西鶴全集がずらりと並べら

れた。それは、戦後始めて接する本格的な日本文学全集であり、これが本当の図書だと感動したことを覚えている。私は授業をさぼって、広い閲覧テーブルで、西鶴全集に読みふけった。

洋書の書庫もできており、洋書は日本語の図書より多かったように思う。ぼくは、シャーウッド・アンダーソンのワインズバーグ・オハイオという短篇集をも楽しんだ。

（のはら　としひろ：元閲覧係長）

志喜屋記念図書館
事務室風景

“びぶりお”編集の思い出

松　島　寛　正

1967年５月、“びぶりお”の第１号が発刊されて、今年の９月発行で記念100号になるとの事で、大変うれしく感慨無量であります。

第１号発刊以来、今日まで滞りなく継続して発行され、図書館の広報紙として、図書館と学生、教官との相互のコミュニケーションをよくする目的を以て、重要な役割を果たしてきました。これからも毎年毎年充実して21世紀に向かって琉大図書館の発展と共に発行しつづけることと思います。

私は昭和52年４月、受入管理係より参考調査係へ配置換えになり、それから４年間“びぶりお”の編集の仕事をすることになりました。特に大学図書館の認識と近代化を深めるという趣旨で、教官から寄稿していただきました。忙しい研究のあい間に、出張中、新幹線で原稿を書き上げて提出していただいた教授、私達職員と苦楽を共にして下さいました館長の玉稿等、その当時の印象がありありと記憶にのこっております。

また、職員相互の切磋琢磨という事で、若い職員である松原君、新城さん、伊佐君にも面白い随筆、研修や出張の模様を書いて貰いました。各係の係長も積極的に資料を提出しました。山田さんは資料や利用面から随時執筆しました。新井さんも閲覧統計表、書評をたびたび提出しました。郷土史研究家の新城さんも沖縄史の書誌稿等を掲載しました。その他いろいろ思い浮かばれますが、このように、館内職員の協力と、教官寄稿者のご支援によって、“びぶりお”は作成され、また事務長平良さんの指導助言によって、私は何とか無事に仕事を終え、ほっとした思いでありました。

“びぶりお”を編集した参考調査室も、今はありませんで名残り惜しい気がします。現在復元した首里城の竜樋のその上あたりに、昭和30年12月10日、５階建の志喜屋記念図書館が、琉球大学の「心臓」として竣工し、県民や利用者から25年余も親しまれました。その５階の洋書室の入口に参考調査室がありました。眺めもすばらしく、山田さんと一緒にそこで仕事をしました。今から考えると、なつかしい思い出となりました。

“びぶりお”100号記念号に、思い出を書かせていただき恐縮していますが、最後に、“びぶりお”100号記念の出版を祝し、その発展を心からお祈り致します。

（まつしま　ひろまさ：元閲覧係長）

退職後雑感

山田　勉

「今何をしていますか。」とよく聞かれるが、とっさには答えにくい。また、調査ものなどで職業欄も記入しにくい。無職というのはぐうたらと同じ意味のような気がするのである。しかし就業時代と殆ど変わらない忙しさで、親戚の冠婚葬祭はすべて出席しなければならないし、週に1回2時間ずつ、2ヶ所でアルバイトをして、更に週に4日くらいは農作業をしている。就業時代の仕事とは違って、親戚廻りも楽しいし、アルバイトをすれば自分が自由に使えるお金が入る。農作業は趣味でやっていることなので、義務ではないから結構楽しいものである。本音では職業は農業といいたい所だが、これを生業としている方々に悪いような気がする。たかが年金生活者のくせにと言われそうで、やはり職業は「なし」である。

百姓のまねごとをして解った事だが、播種や植付が適当な時期であれば良くできるのだが、すこし時期がずれても収穫は、にわか百姓の技術では大差ない。むしろ最も大事な事は、適当な品種を選ぶことである。おそらく専門家は、沖縄では大抵の作物は年中作れるというであろう。しかし僕のようなにわか百姓には、殆どの野菜は秋蒔の方が作りやすい。病害虫が少ないように思われる。この秋蒔野菜の収穫後の春には瓜類を蒔いたり、植えたりする。不思議なことに葉菜類があまりできない時期が瓜類の季節なのである。早春から初夏の頃までに穴を掘って、堆肥と鶏糞をたっぷり入れ、土とよく混ぜて基肥とし、少し土をかぶせてその上に瓜類を植え付ける。キュウリ、ヘチマ、ニガウリ、トウガン、カボチャなど、これだけの種類をそれぞれ20本ぐらい植えれば300坪くらいの土地は、その葉で夏は埋まってしまう。夏は耕さず、楽をして収穫だけすれば良い。

（やまだ　つとむ：元情報サービス課長）

附属図書館33年の思い出

新井裕丈

月日がたつのは早いもので、勧奨退職してから早3年目になる。小生は、昭和33年4月1日の就職だったので33年間在職した事になる。昭和33年といえばアメリカ軍統治下にあり、過酷な毎日を強いられていたが、米軍用土地代一括払いを始め、通貨B円（米軍発行の軍票）の米国通貨ドルへの交換、そして安保条約改定交渉（沖縄を含めるかどうか）など沖縄社会は騒然としていた。爾来沖縄県が激動の連続だったように、琉球大学附属図書館も例外ではなかった。その主なものはまず本土復帰であり、復帰と同時に小生は整理係長の職に就いた。米軍統治27年間の国立他大学との格差是正のため予算が増大、整理冊数だけをみてもそれまでの約4倍前後に増加、係員の残業はもとより他係職員の援助をうけた事が思い出される。5年間の整理係勤務の後、昭和52年5月1日閲覧係に配置換えになったが折りからの大学移転に伴い附属図書館も移転業務が待ちかまえていた。当時の蔵書冊数は、約33万冊で宮島恵曠雑誌係長（当時）と小生等が主幹になって準備にあたり、56年9月1日の新館オープンに向けて7月13日から業者と図書館によって作業は始められ、8月8日に終了した。移転業務は附属図書館の大事業であり、館長以下全図書館職員の協力を得て行われた事はいうまでもない。

一方、情報化社会に即応すべくコンピューター研究委員会（委員長宮島恵曠）のもと、開架閲覧図書約7万冊の書誌情報の入力、IDラベル貼付作業（業者、図書館）が実施され、昭和57年10月22日から閲覧業務システムが稼働した。稼働には当時の計算センター（現情報処理センター）講師鶴岡知昭氏と整理係職員だった松原敏夫、本郷清次郎両氏に負うところ大であった。その後小生は参考調査係を経て60年9月、医学部分館へ初代図書館専門員として赴任した。分館には5年半在職したが業務の電算化

やCD-ROMの事もさることながら平成２年11月に医学部分館の当番で開催された第38回九州地区医学図書館協議会総会のお手伝いが出来ず草場昭分館長を始め、両係長、職員にご負担をおかけした事である。

在職中二度も体調をくずし、全図書館職員にご迷惑とご心配をおかけした事大変申しわけなく思っております。

最後になりましたが歴代の図書館長、分館長を始め、上司・同僚のご指導と部下のご協力を得てなんとか公務員生活を終える事が出来、大変有難うございました。

（あらい　ひろたけ：元図書館専門員）

保健学部図書室のころ

平　陽子

那覇市の与儀に県民願望の保健学部が新しい学部として創設され、図書室を開いたのは、昭和45年のことで、何もないところから苦労して創りあげたのは、山田さん、渡慶次さん、本永さんであり、その出来上がった図書室を引き継いだのが係長の野原さんと私で、昭和51年であった。

当時は保健学部の建物内の教室を借りての図書室開室であった。廊下をはさんで講義室があり、開館時刻は９:00であったが、私達が出勤すれば学生達が入ってきて、講義前の下調べや、リポートのしあげをしていた。学生数は、２、３、４年次で合わせて180名で保健婦・助産婦・看護婦３つの国家試験を受ける学生が多く真剣に勉強していた。

講義中でも、駆け込んできて辞典などを調べて、ぱっと出ていったり、集団で時間中に図書室で何か調べていて、出欠をとっているよと友達が呼びにきて、ぞろぞろと教室に戻っていくのを見て一人笑ったこともあった。昼の休み時間には、ピアノを誰かが弾いてコーラスが流れてきて思わず聞きほれたこともあった。

困ったのは洋雑誌の誌名で、初めて接する専門用語が多い上に、略名で先生方から電話で問い合わせがくることだった。「JAMAの○○巻○号は？」とか「ProNASの○月号は？」早口で聞かれるので、「え？ジャマ？」「プロナス？」とりあえずカタカナで記録し、後程お電話で連絡申し上げることにして虎口は一時逃れ、雑誌の略記表をトラノマキとして現物を捜しまわったものだった。あの頃は雑誌の文献複写を他大学の医学部図書館に依頼するのが大きな仕事だった。

待望の医学部が開設され、現在の医学部分館になるまでの数年間を小さな図書室で働いたことは、懐かしい思い出になっている。

（たいら　ようこ：元医学部分館閲覧係長）

不夜城・志喜屋記念図書館

沖縄関係資料収集の思い出

仲西盛秀

私が沖縄関係資料の収集に携わったのは，昭和50年度から52年度，60年度から63年度にかけてであった。昭和49年度に整理係から参考調査係に配置換になり，その年は戦後資料収集委員会が収集した595,000枚の米国の沖縄統治資料のうち，米・琉政府往復文書500巻（約125,000枚）の製本準備に追われた。戦後資料には書名がなかったので，当時の参考調査係長山田勉さんが統一書名をつけて，それを製本リストに仕上げていった。

昭和50年度から沖縄関係資料の収集は「沖縄研究資料複写計画表」により，年次計画で収集することになった。この複写計画表は，当館にない資料を他館の蔵書目録等によりリストアップしたものである。しかし他館の蔵書目録が揃っていたわけではないので，リストは不備なものであった。また，図書館職員には資料調査目的の研修（出張）はなかったので（現在もそうであるが），沖縄関係資料に関心のある先生方に所蔵情報の提供をお願いした。特に，当時本学の助教授であった我部政男先生（現山梨学院大学教授）には大変お世話になった。この年の複写枚数は約150,000枚（730巻）であった。これらの資料の多くは東京に集中しており，業者に複写と製本を依頼した。所蔵機関は防衛庁戦史室，内閣文庫，国立公文書館，国立国会図書館，外務省外交史料館等18機関および個人におよんだ。資料の所在調査および確認，複写依頼の折衝の面倒は我部先生にお願いした。

昭和51年度には，外務省外交記録文書94リール等220リールのマイクロフィルムと402冊の紙焼き複製をした。これは文部省配当の格差是正費による収集である。

昭和52年度には，文部省から沖縄関係文献資料保存事業費の配分をうけた。鹿児島県立図書館等12機関から273リール，296冊を複製収蔵した。

この間に戦前の資料の大方は収集されたと思っている。その後の収集は，昭和57年に沖縄研究資料調査収集小委員会が設置され，文部省から毎年配分される上記の保存事業費による大型コレクションの収集について，委員の先生方の協力をお願いした。委員長の比嘉政夫先生および委員の先生方のご協力に感謝したい。収集された資料は，沖縄関係資料目録増加版第1集および第2集に収録されている。

ともあれ，私が沖縄関係資料の収集に関わったころは我部先生のような図書館への強力な協力者がおられて大変助かった。沖縄関係資料の収集に関しては先生を抜きにしては語れないことを明記しておきたい。なお，先生は琉大を退官されるとき267リールのマイクロフィルムを図書館へ寄贈しておられる。

沖縄関係資料の収集は現在も続いており，その成果は増加目録第3集として発行される予定である。さらに，既発行の3冊の目録を加えてデータベース化し，パソコンによる検索も可能になっている。活字印刷による目録発行の世代からすると隔世の感がある。

（なかにし　もりひで：図書館専門員）

「琉球の風」の行く末

宮里　愿

物事の捉え方には、正否は別にしてその事の生じる意図を自分なりに頷ける瞬間があるように思う。昨今の「琉球の風」に思うことがあった。

昨年、84年以降の沖縄関係資料のデータ作成・データベース更新を図書館全職員一丸となって無事終了させ、本館と分館においてパソコンから検索できるようになった。現在は、引続きデータ作成（目次等の内容は後日追加入力）と定期的なデータベース更新の体制を整えている最中で、10月からは運用を開始する予定である。

ここまで来るのに約4年経ったが、その間、

コンピュータ処理を担当しながら、何度もある不思議さを感じることがあった。スタートの時から、予め計画された如く、このシステムの構築を目指して次々と人、物、事が織りあいながら準備されてゆく感じであった。パソコンを使える者と冊子体目録との出会い、OCRのデモ機との出会い、同好の図書館職員との出会い、図書館にパソコンの設置、図書館事業として教育研究学内特別経費の獲得、等々、また、それを支える地下水脈のような図書館職員の心意気と協力、このうちの一つでも欠けたらここまでは来れないと、その折々に感じた。

ある時、なにかのきっかけで再びこの不思議さを味わった時、ふと、これが図書館に届いた「琉球の風」なのかと妙に納得し、これが「琉球の風」ならば、この風が琉球のこの図書館に何をもたらそうとしているのか、次にこの図書館からどんな風を送り出してほしいのか、考え込んでしまった。

先輩達の冊子体作成が吹き始めとするならば、今はどの辺りまで吹いているのか、この後、その風がどこまで吹くのか気になるが、今後とも資料及びデータを充実させ、自大学の研究者だけでなく、願わくば県内外の大学及び公共図書館、一般研究者までこのデータベースの利用という恩恵に浴するまで吹いていて欲しいと思う。

100号記念号の発刊を喜ぶとともに、この沖縄関係資料の出来事も喜びの一つとして心に留めておきたい気持がする。

（みやさと　すなお：学術情報係）

「琉球大学図書館」のこれから

前　田　正　三

図書館報「びぶりお」100号記念号が刊行されることを、心よりお祝い申し上げます。

◎　社会のマルチメディア化と図書館

最近、大学の新設学部に○○情報学部という学部名が目につく。それらの学部は、これからの高度情報化社会を目指したカリキュラムが工夫されている。

このような現状から、今後の図書館でも、利用者のニーズとしてマルチメディア統合機器への対応が予測される。

幸いに、琉大図は、大学の視聴覚資料、放送大学のビデオ学習センター、学術情報センターなど、利用者にとって各種の情報源が利用できるが、21世紀に向けシステム化が検討されることを期待しております。

◎　「びぶりお」の広報誌としての役割

現在、組織体における企画の位置づけが重要であることは周知のとおりであるが、特に、広報活動の動向が問われている。目的にあった情報の収集、分析、企画、編集などなどである。

利用者への思いやりが「びぶりお」の伝統として、今も生かされていて活動されていると思いますが、県民への情報サービス、公共図書館とのネットワークにもデータ内容が生かされることを願っています。とくに、沖縄関係資料ＤＢの充実が必要と思います。予算と労力が大変でしょうが。

今後の、琉球大学図書館が、琉球全域における学術情報センターとして発展することを願っております。

（まえだ　しょうぞう：元事務部長）
（大阪電気通信大学）

マクロビオティックということ

重　松　多喜造

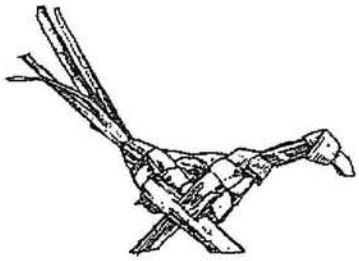
生きものは食べるから生きていける。生きることの根本原則である。地球上には植物と動物とがあり、それらはお互いに生きることに協力しあっている。云い換れば、植物は動物に、動物は植物に、それぞれが依存しあって生きている。

人間以外の動物、特に自然界の動物は、何をどれくらい食べるかをわきまえているようであるが、人間は自然界の根本的な基本原則から逸脱した食生活を多く取り入れるようになり、精神的、肉体的不健康をきたしているケースが多くなっている。マクロビオティックはこの問題と取組んでいる「食養道」ということができる。

マクロビオティック、もとは石塚左玄(1851-1909)や櫻澤如一(1983-1966)の「食養論」にはじまる。人は誰でも健康でありたい、何をするにも健康でなければ面白くない、また、一応それなりの成果をあげ得たところで病ともなれば人生無意味に終ることになる。世の中が進むにつれて難しい病が現われてきて、まさに人間と病のシーソーゲームのようである。人間は地球上で最も進化した動物である。地球を安全に維持していくためには、地球上の人間すべてが健康で平和な生活を営むことができるということが基本でなければならない。地球規模・宇宙規模でのマクロ的な視野で人間の健康問題を追求しようとしている。因みに、大阪の正食協会発行、月刊誌「コンパ21」1993年6月号によれば、マクロビオティックとは、日本に古くから伝わる食養生と東洋の深い知恵「易」の原理を二本柱に、櫻澤如一氏が「無双原理」として確立、世界に広めた新しい生活法で、その根底には「玄米正食」という自然に則した食事法がある。欧米はもちろん、日本でも、たくさんの人が生活に取入れており、新時代をリードする生活法、食事法として、マスコミ・医学・教育・食品業界など各界から注目を浴びている。

以上、過去、僅か2年間ではあったが、沖縄は身近かに玄米辯当が手に入るよい時代を送らせていただいたことを思い出しながら、そしてなによりも皆様方のご健康を念じながら拙文を呈しました。

（しげまつ　たきぞう：元事務部長）



図書館報雑感

松　浦　　正

図書館報の「びぶりお」が100号を迎えるとのこと、職員の方々の努力に敬意を表します。この100号を記念して一文を依頼されたこの機会に館報なるものについて普段感じていたことを述べさせて頂くことにした。

組織にとって活動をＰＲすること特に図書館のようなサービス機関にとって広報誌の刊行は欠かせない手段である。

大学図書館でも多くの所が図書館報を刊行している。週に2度は回覧で幾つかの大学図書館の館報が廻されてくる。できるだけ目を通すように心掛けているが中には最初のページを見ただけで終わってしまうこともある。こんな経験も私だけではないと思う。それだけに当事者の一人として広報の難しさを感じる。

館報の趣旨は利用者に図書館をよく知ってもらうことに尽きる。しかし、一言に利用者と言っても教官から学生まで様々な構成員を対象にするためなお難しい。

今回、国立大学図書館協議会の自己評価基準検討委員会がまとめた国立大学図書館における自己点検・評価について－よりよき実施に向けての提言－の管理運営計画の部分で広報活動が取り上げられ評価の視点（例示）で記事内容の時宜、広報メディア、配付先・方法が記されているが、これらはほんの一部で内容の時宜以上に、誰に読んでもらうか、読ませるのかが大切な視点だと思う。例えば用語についても略語だけの場合が非常に目立つ。確かに図書館職員には当然の用語も読者に判るのかと思われることもしばしばである。例えば「OPAC」「NACSIS-ILL」等々である。様々な階層の利用者を対象とする限り細かな気配りが欲しいものである。

また、何処も彼処もが貴重な紙面を割いて館内人事異動を掲載しているようであるが、果して必要な記事なのかどうか。広報に関する自己点検・評価を厳しく行ってみる必要があるように思えてならない。

一方、同じ図書館に携わる者として他の図書館の動きを知るうえでも互いに関心を持っていることも事実である。また、かって勤務した図書館の館報は別の意味で隅々まで目を通さずにおかないものである。琉球大学図書館も念願の増築工事が始まったように聞いている。施設、設備の充実に併せ100号を機会に利用者のための館報を目指してさらに精進して頂きたいと念じている。

（まつうら　ただし：元事務部長）
（大阪大学附属図書館事務部長）

100号に寄せて

及　川　三千男

大分前のことになりますが、私が大学図書館に勤務してから数年後、"大学図書館の近代化"なる言葉が職場での流行語であったような気がします。これは、かの有名な岸本英夫博士が当時の東京大学図書館の大改革に際し提唱したことに始まるものとされています。以後、図書館員の専門性についての検討会とか図書館業務の機械化などが進むにつれて、毎日のように我々は近代化とはなにかの議論を戦わせたものでした。それは職場での研修会は勿論、他大学の図書館員同志との集まりでもまさにホットなテーマでありました。

ところで昨今の大学改革の進行にともなって、大学図書館の自己点検・評価が到るところで話題となり具体的な項目の設定が急がれています。しかし、これまで多くの大学で出されてきた各種の図書館報が、図書館サービスを紹介したり、図書館の利用者にカレントな情報を提供してきたことを考えると、いわゆる点検・評価のためのポイントは意外に身近なところから始められる気がします。周知のこととして、欧米の大学図書館にはライブラリアンズ　リポートなるものがありますが、これなどはまさに図書館評価そのもので、当然ながら責任ある立場の図書館長が自己の職務として毎年書かなければならないことになっているものです。この点、以前出されていた琉球大学の図書館年報はその詳細な業務報告がなされていることで、私にはとても関心のあるものでした。

今回第100号の記念出版を迎える"びぶりお"には、常にその表紙に堂々たる威容を誇る図書館正面の写真が載っていることがとても印象的です。そして、その図書館が利用者のためのサービス向上にますます磨きをかけている姿は、正に"学びて厭わず"のモットーに合い通じるものがあるのでしょう。

（おいかわ　みちお：前事務部長）
（筑波大学図書館部長）

八月エイサー

橋本健一

8月になると沖縄のエイサーを思い出す。旧盆の前から夕方、集落毎に若者達の練習する太鼓が、遠くサトウキビ畑を通ってくる風に乗って聞こえ、囃し言葉を言いながら広場や公民館の広間で踊る姿が目に浮かぶ。太鼓の強弱の音に足を高く或いは低く、体を飛躍させるエイサーは、心をわくわくさせる。また、静かにすり足で鐘をたたく踊りも心を穏やかにして見るものを安心させる。いずれも男女の若者たちが織り成す美しい様式を持っている。琉大の図書館は、青い空の下デイゴと南洋杉に囲まれ、明るい茶色タイルのバランスの取れた建物であった。内部は、幾つもの絵画と彫刻、タピストリで飾られ木製の机と椅子のやすらぎを感じさせる図書館である。しかし、十年を経ずして開架書架、書庫はいっぱいになり、書庫と閲覧室の増築が待たれていた。この度、関係者の理解とご尽力によって増築が実現することになったことは、喜ばしいことである。これが竣工した暁には一段と図書館機能が充実することを期待している。今後の学術情報メディアの発展を踏まえて、学内の学術情報のセンターとして教官、学生に優れた情報提供サービスをするだけでなく、県内の研究者や他の国立大学等に対しても情報提供に応じられる図書館としてその役割はますます大きくなることが予想される。図書館にはそれに答え得る施設ができ、職員がいて、何よりもそうした図書館を琉球大学全体がバックアップしている。私は、昭和から平成に変わった昭和62年(1987)10月から平成2年(1990)3月まで琉大図書館にお世話になった。思い出はいろいろあるが、図書館資料のことでは、浦添家「伊勢物語」を保存修理のため京都の宇佐美松鶴堂まで持参したことや沖縄風俗絵巻を見て熊本大学の好意でカラーコピーをさせてもらったことが、印象に残っている。その後、琉大を離れてからも新任地の大学に琉大が所蔵していない沖縄関係資料があるかが気になる。それは、琉大図書館が沖縄関係資料をできるだけ網羅的に収集しようとしているからであり、図書館の先輩諸氏が努力して作成した沖縄関係所蔵目録を図書館の若い職員が機械可読のデータベースにしてユーザーに広く提供しているからである。

最近、高校野球とともに沖縄音楽の活躍が目覚しいのも、嬉しいことである。私にとって沖縄はまだまだ尽きぬ魅力をもっている。

(はしもと　けんいち：元情報管理課長)
(京都大学附属図書館情報サービス課長)

ウマンチュの大学図書館へ

阿部雅機

「びぶりお」の100号刊行をお慶び申し上げます。また、今年はいよいよ念願の増築工事が実現するとうかがいました。平成元年から3年間お世話になった者として、沖縄を離れた今も大変うれしく存じております。

さて、この度原稿の依頼を受けましたが、紙数が限られていますので、誤解を恐れず印象深かった事柄だけを列挙してみました。

琉球大学附属図書館が利用者に愛され、ますます発展されますことを心からお祈りしております。

(驚いたことその1)

暑さが長く続くこと。光の眩しさ、台風のすごさ。絡み合った樹木と珍しい動物。琉球舞踊、空手道場の多さ。「石敢當」、拝所、御嶽、城、風葬墓。神道の源流を見るような自然崇拝。ヨコ型社会。子供達の夜遊びと交通事故。日本語の原型を感じさせる言葉。栄華と抑圧の歴史。基地と犯罪。人々のあまりにもおおらかなこと。

(驚いたことその2)

ザウテルシバン虫の発生と書庫の燻蒸。マイクロフィルムの劣化。熱心な沖縄研究資料の収集事業と電算化。市民への図書館開放。公共図

書館の出版事業。

（苦しかったこと）

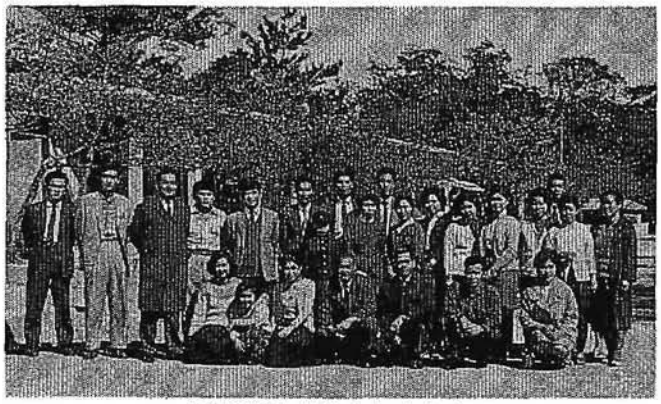
駆け出しの管理職で、十分期待に応えられなかったこと。1年間を長男と2人で過ごし、料理、洗濯、裁縫等に苦労したこと。

（うれしかったこと）

25年振りに詩が書けたこと。初めてフルマラソンに挑戦し、完走できたこと。走る仲間と出会ったこと。沖縄県大学図書館協議会や、首里バトミントンクラブのメンバーに仲良くしてもらったこと。家族と共に沖縄で過ごし、そして少しでも「沖縄」を知ることができたこと。

（あべ　まさき：前情報サービス課長）

（愛媛大学附属図書館情報管理課長）



図書館をささえた人たち

二つの思い出

宮城　健

1963年、当時の附属図書館長仲宗根政善先生が任期半ばで、布哇の東西文化センターの招きで渡布された。先生は閉架式から開架式へと附属図書館の近代化に大きな足跡を残された方である。学長の要請で、仲宗根先生の館長残任期間を私が御引受けすることになった。書架が開放された所為でもなかっただろうが、当時の利用者、特に学生による図書の切抜きに図書館の閲覧係は頭を痛めていた。その対策として、当時の最新型複写機（多分エレファックスと呼ばれていた）を購入して、複写サービスを充実することにした。この複写機の設置が図書の切抜き防止にどれだけ役立ったかは記憶にないが、思いがけないところで役に立った。それは、東西文化センター所蔵の琉球関係資料中、在布中の仲宗根先生が選ばれた貴重資料のゼロックスによる複写物と、琉球大学附属図書館所蔵の琉球関係資料のエレファックスによる複写物の交換がなされたことであった。その交換によって、琉球大学附属図書館の琉球関係資料は質、量共に充実した。

沖縄の本土復帰前、即ち琉球政府立大学の頃は、琉球政府からの図書購入費が少なく、図書整備は遅々として進まない状態にあった。1965年、時の佐藤総理が御来県の際、琉球大学に医学部を設置したい旨の発言を機に、文部省は琉球大学の整備に関心を示すようになり、図書購入費として、多分十万弗の予算を計上してくれた。当時は米民政府の統治下にあったため、図書購入手続きの事務が煩雑で、米民政府と日本政府宛に提出する購入図書リスト作りにも図書館職員は苦労したようである。其の頃、購入図書の打合せのため文部省図書館課を訪れたとき、購入希望図書リストに細かい注文をつけた課長補佐を制して、図書の購入に就いては余計な注文をつけずに、琉大側に一任しなさいと云うてくれた課長の一言を有難く思った思い出がある。

（みやぎ　けん：第4代図書館長）

較差是正費など

杉浦正輝

私は1970年に琉大保健学部の第1陣として赴任し、15年間の勤務を終え、1985年に定年退職した。図書館長を拝命したのは、1973～75年の2年間であり、本土復帰（1972年5月）後、間もない頃であった。

較差是正費　皆様は「較差是正費」をご存じだろうか。琉大は復帰時に国立大学の仲間入りをした。しかし、同規模の国立大学に比べて、施設、設備、図書等がかなり劣っていた。なるべく早く追いつくために、文部省は較差是正費を予算に上積みした。学部には5年間だが、図書館には7年間だったと記憶する。

図書館運営委員会　復帰前後の図書館の運営は必ずしもスムーズではなかった。真栄城朝潤局長に励まされ、私は図書館の運営を軌道に乗せるべく、最大限の努力を払ったつもりである。

私が最初に手をつけたことは、今まで有名無実であった「図書館運営委員会」を毎月、定期的に開催することであった。まず、運営委員会が較差是正費を公正に審議し、各学部への配分を決めた。ついで、平良恵仁事務長の協力を得て、審議決定どおり執行した。まさに、当たりまえのことをしただけである。

人間関係　最近でこそ、医学部から学生部長や図書館長が選ばれているが、復帰前後にはそんな状況ではなかったように思う。しかし、何の風の吹きまわしか、私に図書館長のお鉢が廻ってきた。当時の金城秀三学長の考えがあったのかもしれない。

図書館長に任命されたのを契機に、私は保健学部の枠に止まることなく、琉大全体に広く人間関係を築くことができた。人間は1人では生きていけない。広い人間関係こそ、人生における「宝」である。

この意味において、私は図書館を手始めとして、図書館から人間関係という大きな恩恵を今もなお受けている。深く感謝の意を表したい。

（すぎうら　まさてる：第8代図書館長）

「びぶりお」100号によせて

伊江朝章

図書館報「びぶりお」が100号記念号を発行する運びとなったという。まことにたのもしく、祝意を表したい。

「びぶりお」は小冊子ながら新鮮な誌面で折々の図書館情報や、多彩な論稿など、図書館とユーザーを結ぶ情報誌として堅実な活躍をつづけてきた。昭和42年の発刊といえば優に四半世紀を超える活躍である。

首里キャンパス時代に図書館長を拝命してアッというまの任期ながら、ユーザーにサービスする立場の図書館の使命について、いろいろ勉強させていただいた二ケ年であった。当時ようやく図書館業務が「電脳化（コンピュータライズ）」される時代を迎え、平良事務長が部下職員を叱咤激励して資料のコンピューター・インプットを急がせていた頃である。

図書館の使命はユーザーの多様な要求に応えて、できるだけ多くの資料を揃え、敏速にユーザーの手許に供用するということにつきるのであろうが、情報化社会の発展は国内外の図書館間のサービス・ネットワークの形成を可能にし、「電脳化」時代の到来はユーザーと図書館とのサービス距離をかぎりなく短縮することであろう。

しかし、図書館サービスがいかに「情報化」され、「電脳化」された時代を迎えても、ユーザーの方でその恩恵に浴することに無関心であれば宝のもちぐされである。とくに大学図書館では、学生諸君を学術探検の宝庫ともいうべき図書館に常時足を運ばせる努力が図書館サービスの一環として要請される。

学生にとって魅力ある図書館、心安まる図書館、学習意欲をたかめる図書館でなければ、

キャンパスの「心臓」としての機能を充分に発揮することはできないわけである。その意味でわが「びぶりお」の役割は大きく、その活躍に期待するところ大である。

（いえ　ともあき：第9代図書館長）

志喜屋記念図書館・閲覧室風景

附属図書館と私

幸地成憲

1979年10月から81年9月までの2ケ年間、私は附属図書館長の職にあった。当時の附属図書館事務長は図書館業務に造詣の深い平良恵仁氏であった。

辞令交付のあった日のことだったと思うが、事務長は館長室で私にお茶をすすめながらおもむろに切り出した。

「館長、覚悟して下さい。先生の在任中に図書館は2つの大きな仕事をやることになっております。先生に迷惑をかけることはいたしません。面倒な細かい仕事は全部自分達で責任をもってやります。先生は館長としての覚悟と決意をして下されればそれで十分です。」

学長から就任についての打診があった時、深く考えず、気軽に承諾の返事をしたことが悔やまれたが、もう後の祭りであった。

こうして私は、在任中に国立大学図書館協議会総会の沖縄での開催と図書館の首里キャンパスから千原キャンパスへの移転という大きな仕事を抱え込むことになった。しかし、"案ずるより産むが易い"という言葉もあるように、事務長を中心とした当時の図書館職員の一致団結した献身的な協力に支えられて無事この大任を果たすことができた。改めてこれらの方々に厚くお礼を申し上げる次第である。

図書館協議会総会は81年6月の23日と24日の2日間にわたって都ホテルで開催されたが、全国から二百名余りの参加者があり、盛会であった。初日は「慰霊の日」とかち合っていたので、正午には参加者全員で戦没者に対し黙祷を捧げた。図書館の移転は81年の7月と8月の夏休みを利用して行った。夏休み中は休館とし、9月から開館した。移転時の図書館の蔵書数は約33万冊であったが、最近の図書館発行の「びぶりお」によれば、その蔵書数はすでに70万冊を超えているという。図書館の蔵書数の増加はその後の大学の発展を物語るものであり喜びに堪えない。

（こうち　せいけん：第11代図書館長）

植樹の国際化

木崎　甲子郎

先日久しぶりにループ道路から図書館へのプロムナードを歩いてみた。ガジュマルの枝葉が生い茂って、木の間隙に図書館の壁が見え隠れするほど厚い緑だった。あの頃はループ道路から図書館の建物がすっからかんに見えたことを思い出した。

その頃、図書館もできたばかりで、まわりにどんな木を植えようかと、よりより話し合っていたものだ。ぼくはやはり花の咲く木がいい。とすれば、トックリキワタなどがふさわしい。しかも、一本だけではだめで、数本以上まとめて植えれば花の季節には素敵だろうな、と思っていた。ホウオウボクという手もあったが、これは理学部と教養部の間の並木道にしたらいいと考えた。

とにかく、トックリキワタを図書館のまわりの適当なところに植えたいと、本部の緑化委員会に申し入れた。しかし、答えは「ノー」、理由は「地元の土着の木を植えるべきで、外来種はダメ」。

たしかに、ガジュマルもオオバギもテルハボクも悪くはない。しかし、大木になったガジュマルなどの濃緑の葉の間にトックリキワタのピンクの花の群れは想像するだけでも鮮やかだ。

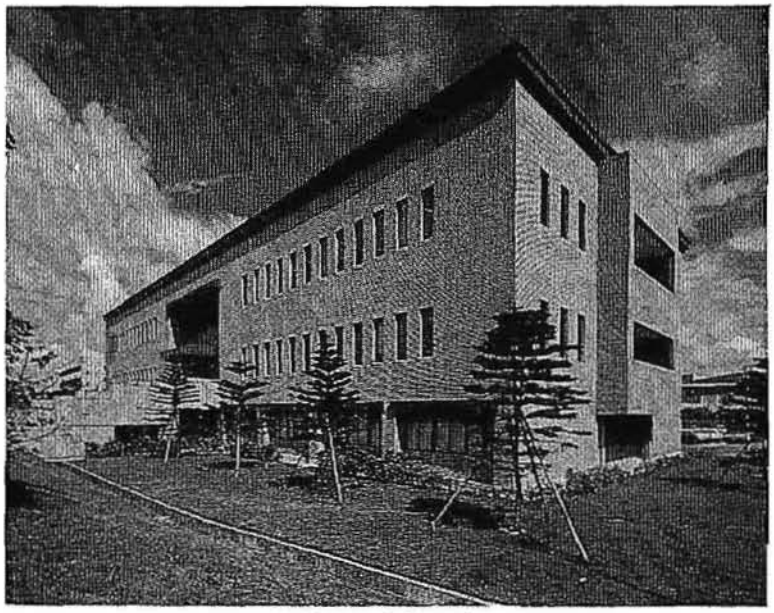
だが、あの頃の緑化委員会は「ナショナリズム」の傾向が強かったようだ。ま、在来種は根付きがよい。外来種は風に弱い、ということもあっただろうが、キャンパス全体が森になれば、それも解決するだろうと思われたのだが。

考えてみれば、在来種といわれるものでも外からやってきて年月を経て適応してきたものが多い。新しい外来種を加えることによって、森も豊かになるだろうし、美しい花木の少ない沖縄の、とくに大学のキャンパスのような限られた空間では、在来種と外来種の混淆林をつくるという実験ができる。そこになにか今までにない新しい景観が生まれるかもしれない。

琉大のような広いキャンパスは森林植物園とするにふさわしいと思われるのだが、それはともかくとして、熱帯濃緑のなかにデイゴの赤、トックリキワタのピンク、ホウオウボクの赤黄などの花群をこきまぜた国際色豊かな森のなかに学部の建物が埋まっている景観は想像力をかきたてるものがある。

大学とはそうしたものであろうに。

（きざき　こうしろう：第12代図書館長）



現附属図書館・竣工

国連寄託図書館誘致の秘話

瀬名波　榮　喜

来る11月には全国国連寄託図書館会議が本学で開催されるという。かねてより寄託図書館誘致の秘話を明らかにしてくれるようにとの声が聞かれたので、この機会にその設置に功労のあった方々について若干ふれておきたい。

私が図書館長として国連本部を訪問したのは1985年7月24日のことである。寄託図書館の設置に関する正常なルートは、学長から外務省国連局長を通して国連本部と交渉するのが建前となっているのであるから、私がとった行動は尋常ではなかったといえる。

にも拘らず、あえてそのような直接行動に出たのは、国内ではいかに交渉しても不可能だとわかったからである。国連の寄託図書館の原則として一国5館以内ということだが、日本ではすでにそれを上回っているのが最大の理由である。そこで、私は東京在国連広報センター長ディビッド・エックスレー氏に会うことにした。彼も、彼の女性担当官も、寄託図書館の設置は不可能だときっぱりといった。そうなら、国連本部に直接交渉してもよいか、ときいたところ、それはよかろうということになった。

私は失望感に襲われ、センターを出ようとすると、一女性が私をひきとめた。彼女は、「先生は琉球大学の教授でしょう。絶対にくじけずにプッシュしてください。実現するまで。」といって私を激励してくださった。それが茨木邦夫現医学部長の妹さん坊下隆子事務官であった。私は失望感と期待感の錯綜する気分でセンターを後にした。

幸いに恩師岸本本秀先生が100萬円を旅費・滞在費として寄附してくださったので、さっそくニューヨークに飛び立った。そちらでは、仲地政夫国連本部広報課長がすべてのアポイントメントをとってくれた。その中でも最も重要なポストにあるのが、アイリーン・コロットネフというハマショルド国連図書館外交官であった。彼女に会えたのは、7月24日（水）午前10時30分であった。私は設置要請文を彼女に提出し、それに基づいて設置の必要性を長時間にわたって説明した。すると沖縄や琉球大学に理解を示すようになり、設置に必要な条件に関し、次から次へと質問を発した。ついに、彼女は国際性豊かな沖縄と琉球大学が今までどうして設置申請をせずに黙っていたのか、と逆に問われる始末であった。国連創設40周年記念年でもあり、設立に協力したいので、明日までに国連日本政府代表部から設置承認文書をもらってくるように、とつけ加えられた。

私はその日の午後、ただちに黒田瑞夫特命大使にお会いすることができた。黒田大使は本学元附属病院長小張一峰教授の旧友である。小張先生からの紹介状をさしあげたところ、大変喜ばれ、私を暖かく迎えてくれた。大使は、「琉球大学のことは考えてあげるので、心配はしないように。外務省にはさっそく電話連絡をとっておく。」と親切におっしゃった。その翌日、大使は私のために晩餐会を催してくださった。

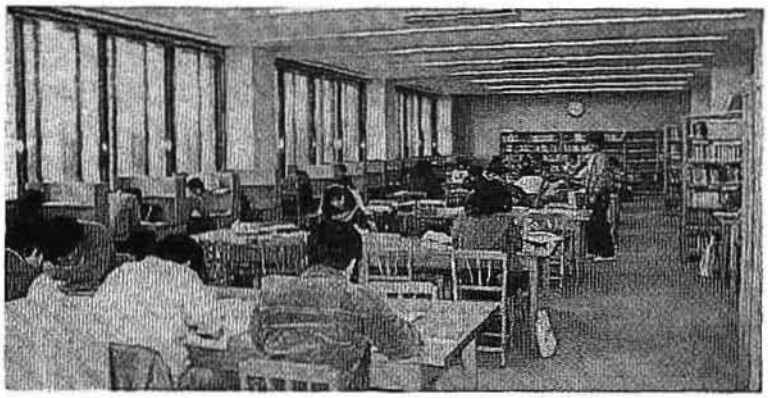
このように国連での交渉は案外スムーズに進んだが、二つの困難な問題が横たわっていた。第一にコロットネフ担当官の退官期日が迫っていること、第二に国連総会開催前に寄託図書館の設置審議をしておかねばならないことなどであった。緊急を要する問題である。

私は、帰国するや、8月24日（金）午後2時30分、外務省を訪問、国連局長山田中正氏に会うことになった。山田局長は、黒田大使からも電話があり、また、稲嶺一郎先生からもよろしくという電話があった、と話された。実は、稲嶺先生は私と共に山田局長を訪問することになっていたが、台風のため上京できなかったのである。山田局長は、私が作成した申請文書をコロットネフ担当官にすぐに電送するよう秘書に命じた。外務省でもこの緊急事態に敏速に対応してくださったのである。

結局、本学に寄託図書館が設置認可されたのは、1986年4月7日のことであった。通常の手続きを経れば、東京大学の例のように3年はかかるけれども、国連本部と交渉を開始以来、たった8ケ月で設置に成功したのである。超スピードというべきであろう。しかも日本における最後の寄託図書館になるであろう、というのである。当初、設置不可能といわれながら、それを

可能にしたのは国連そして外務省国連局関係者とその周辺の方々の深い理解と協力に負うところきわめて大なるものがあったからである。これらの人々の労苦をしのび、寄託図書館を国際理解・交流のため大いに活用されんことを希望するものである。

（せなは　えいき：第13代図書館長）



現附属図書館
閲覧室風景

館長を家庭教師にした男

比　嘉　長　徳

館長（1990年11月～92年10月）を仰せつかって、新たに40名ほどの館員と近づきになれました。県大図協、九州地区図書館協議会、全国の国大図協まで拡げますと、かなりの数の人々と知り合う機会がありました。一度にこれだけ知り合いの輪が広がるということは、そうざらにあるものではありません。特に異動の少ない教官サイドでは、そう言えると思います。そういう意味も含め、任期中の二年間は私にとって大変貴重な経験となりました。お付き合い願った館員の、個性的な人々の顔が思い出されます。

例えば、総務係のU君です。彼とは誕生日が同じという奇しき縁もあり、内心、不肖の息子のような感を抱いていました。ワープロを前に総務の仕事をしている時より、マイクの前で宴会の司会などをしている時のほうが、はるかに輝いた目付きになる賑やかな引き立て役でした。そのU君が最近、体調を崩し、ひと頃の快活さ（騒々しさ？）を失くしているというのが気になります。

こういうことがありました。ある時、終業時を少々過ぎたころ、彼が大きなくりくり目玉を伏目がちにして、不似合いなほどしおらしげに館長室に入ってきました。用件を聞くと、数ページに及ぶ英文を見せて、「館長先生は英文科でしょう？　この大意を訳して下さい」と言う。訳し終わって、「これ総務の仕事とどういう関係があるの」と聞きますと、「いえ、その、実は――うちの姪っ子に頼まれたんです。学校の宿題だそうです」と、日頃の素っ頓狂な声とは違い、消え入りそうな声で言いました。恐らく常々、姪たちの前で叔父の権威を示し、知識情報の殿堂・大学図書館勤務の“見識”を自慢していたのでしょう。英語なんか、へっちゃらだ、と威張ってみせたのかも知れません。それじゃーという訳で、英語の宿題を頼まれたのでしょう。

彼は頭をかきかき、「有り難うございました」と言って、マイルドセブンを3本置いて館長室を出て行きました。100近い国大図協加盟館の館員で、煙草3本で館長を家庭教師にした男は、後にも先にもわがU君以外にいるとは思えません。琉大図書館の、のどかなある午後のことでした。

U君、早く元の元気を取り戻し、職場に再び笑いの渦を巻き起こして下さい。

（「びぶりお」100号記念の祝意に代えて）

（ひが　ちょうとく：第17代図書館長）

次なる発展をめざして

金子　豊

館報が100号を迎えるにあたって、附属図書館が当面する新たな方向をみておきたい。

これまで待望してきた図書館増築工事は、平成6年2月末竣工予定で順調に進められている。新建物にともなう引越と再配置では、昭和56年開館当時の開架スペースを確保することを基本として、建築理念を元通りに生かすことによって増築部分と合せて、快適な学習環境を用意することである。ここで展開される図書館サービスは、10万冊をこえる開架図書をはじめとした参考図書、学術雑誌、国際関係資料などの利用、業務電算化の成果によるOPAC（オンライン利用者目録）の公開、学術情報センターを中心とした情報検索、ILL（図書館間相互協力）サービスの提供、CD-ROM、ビデオテープなどニューメディアへの対応をふくめて、利用しやすい、要望に応えられる図書館をめざしていくことである。また、増築後はほぼ10数年間にわたる増加冊数は収容できる見通しであり、今度の図書館再スタートは本学の大学改革とも重なって、次代への発展をめざした第一歩をしるすことが期待されている（別表参照）。

次に、附属図書館で所蔵している沖縄関係資料は、昭和25年の図書館開館当初から郷土資料の収集に特に努めてきた実績をもとに、現在は網羅的な収集をはかっている。1992年3月までで図書41,105冊、雑誌2,000種、マイクロフィルム5,123リールを数え、そのすべてがパソコンで検索できるようになっている。一方、冊子体目録もすでに3分冊を刊行し、4分冊目を刊行準備中で、この目録に共通している点は、収録資料についてその内容細目を明示し、書誌的内容は利用者に容易に理解できるようにしたことである。この方針はデータベース作成にあたっても貫かれて、検索結果に直接反映されている。検索用パソコンは、本館および医学部分館において利用できる。

今後も沖縄関係資料の維持・発展をはかっていくとして、利用については学内をはじめとして、できれば学外に対してもその活用をさらに広めていくことである。

（かねこ　ゆたか：事務部長）

（別表）附属図書館における進展状況

項目	昭和56(1981)年度当時	平成4(1992)年度
図書館総面積（㎡）	新営　5,440	増築後　8,450予定
図書収容冊数（冊）	430,000	増築後　850,000予定
蔵書冊数（冊）	410,037	741,403
年間増加冊数（冊）	30,658	24,273
雑誌受入数（種）	2,828	3,549
学生数（人）	5,540	7,852
教職員数（人）	1,405	1,813
図書館職員数（人）	32	29
図書館資料費（千円）	142,885	231,426

注）図書館施設としては、この他に医学部分館（総面積1,404㎡、昭和59年5月開館）がある。

沖縄関係資料新着案内

1993年5月～1993年7月

0類　総　　記

1. 我部政男マイクロフィルムコレクション琉球大学附属図書館寄贈部フィルム目録／南西マイクロ編,1992.12　027.9-GA
2. 真境名安興全集　第1巻／真境名安興著　琉球新報社,1993.2　081-MA
3. 歴代宝案（琉球の外交文書）について／小葉田淳著　［日本学士院］,1992.10　093.2-KO
4. 歴代宝案の文書構成及び文書収発経路の研究／上原善哲著　［東風平町］　上原方子,1992.8　093.2-UE

2類　歴　　史

1. 琉球歴史年表 干支入／新城徳祐編著　第5版, 1993.1　200.3-SH
2. 琉球王朝史／新里金福著　朝文社,1993.1　201-AR
3. 沖縄同時代史／新崎盛暉著　凱風社, 1993.3　201-AR
4. 琉球・沖縄受難史／熊谷直著　新人物往来社,1993.2　201-KU
5. 琉球王朝の光と陰／緒形隆司著　光風社出版,1993.2　201-OG
6. 高等学校琉球史／新城俊昭著　新城俊昭,1992.6　201-SH
7. 琉球王国／高良倉吉著　岩波書店, 1993.1　201-TA
8. 図説琉球王国／高良倉吉, 田名真之編　河出書房新社,1993.2　201-TA
9. 中城村史／中城村史編集委員会編　中城村役場,1989－1993　227-NA
10. 米須字誌／米須字誌編集委員会編　［糸満］米須公民館,1992.12　232-KO
11. 沖大東島（ラサ島）の領土の確定と燐鉱採掘／平岡昭利著　［長崎県立大学］, 1992.3　239-HI
12. 先島の「島建て」考／崎間敏勝著　琉球文化歴史研究所,1992.12　240-SA
13. 忘勿石 忘勿石之碑建立事業記念誌／忘勿石期成会編　忘勿石之碑建立事業期成会, 1992.11　250-WA
14. 与世山親方八重山島規模帳／石垣市総務部市史編集室編　石垣市役所, 1992.3　251-IS
15. 富川親方八重山島諸村公事帳／石垣市総務部市史編集室編　石垣市役所, 1992.3　251-IS
16. 沖縄の潤 伊波普猷とその時代／鹿野政直著　岩波書店, 1993.3　289-IH
17. 心の時代を生きる息子に贈る父の青春日記／高嶺善包著　ビジネス社,1993.3　289-TA
18. ハワイ在住六十年の回顧 我が随筆と各界の知識集／山城盛孝著　［Honolulu］山城盛孝,1993.4　289-YA
19. 琉球・小笠原の地誌と地図 南の島々の風土とくらし　国立公文書館内閣文庫所蔵資料展　国立公文書館, (1992)　290-RY
20. 沖縄地理学会10周年記念誌　沖縄地理学会10周年記念事業実行委員会, 1993.2　290.6-OK
21. 私の青空 エアーニッポン機関誌　エアーニッポン,1992.5　290.9-WA
22. ザ・琉球 沖縄紀行　三推社,1993.1　290.9-ZA
23. ぜったい行きたいDO!! 沖縄　徳間書店, 1992.5　290.9-ZE

3類　社 会 科 学

1. 環太平洋観光圏の研究／石川政秀, 佐久川政一, 高良有政編著　沖縄観光速報社, 1992.3　302-IS
2. 公文類聚目録　第8／国立公文書館　［編］国立公文書館, 1985－　310.9-KO
3. 沖縄事情／牧瀬恒二編著　遠松舎, 1992.10－1993.1　312.05-OK
4. 沖縄県議会史　2／沖縄県議会事務局編　沖縄県議会, 1990.3－　318.4-O52
5. 沖縄発～平和へのメッセージ／［那覇市中央公民館編］　那覇市中央公民館, 1992.3　319.8-OK
6. 明治前期における司法制度改革の基礎的研究／菊山正明研究代表, 1989.11　327.1-KI
7. わが国ローカル企業経営者の意識構造 その

地域間比較研究／上間隆則研究代表，1991.3　336-UE

8．県内中小企業の「模合」実態調査　沖縄県産業振興公社中小企業情報センター，1993.3　338.7-OK

9．沖縄の国民年金のあゆみ 復帰20周年記念／沖縄の国民年金のあゆみ編集委員会編　沖縄県生活福祉部国民年金課，1992.11　364.3-OK

10．余暇生活とリゾート開発 岩手・沖縄の事例調査を中心に／余暇問題研究班［編］　関西大学経済・政治研究所，1992.3　365.7-YO

11．おきなわ20年のあゆみ 婦人・勤労青少年行政／沖縄婦人少年室編　沖縄婦人少年室，1992.11　366.35-OK

12．録鮮明 県職労20年のあゆみ／沖縄県職労結成20周年記念誌編集委員会編　沖縄県職員労働組合，1992.10　366.6-OK

13．わがままの哲学 わたしのことはわたしが決める／若尾典子著　学陽書房，1992.12　367.2-WA

14．沖縄の高齢者をめぐる世代関係／新垣都代子［ほか］著　多賀出版，1993.2　367.3-NI

15．沖縄における社会的・教育的適応行動に関する研究／東江平之研究代表　琉球大学教育的適応行動研究会，1991.8　371.3-AG

16．沖縄県学校給食会30年のあゆみ 創立記念誌　沖縄県学校給食会，1992.12　374.95-OK

17．林竹二・斎藤喜博に学んで／安里盛市著　一茎書房，1992.7　375-AS

18．オキナワ平和をつくる／創価学会婦人平和委員会編　ジュニア版　第三文明社，1993.3　375.3-SO

19．学校数学における真の理解に関する研究／金城松榮研究代表，1990.5　375.4-KI

20．瀬底小学校創立百周年記念誌／本部町立瀬底小学校創立百周年記念事業期成会記念誌　編集部編　本部町立瀬底小学校創立百周年記念事業期成会，1992.3　376.2-MO

21．本部町立水納小中学校分教場創設五十周年・独立三十周年記念誌／水納小・中学校創設五十周年独立三十周年記念事業期成会記念誌編集部編　本部町立水納小・中学校創設五十周年独立三十周年記念事業期成会，1992.12　376.2-MO

22．白椿 沖縄市立越来小学校創立百周年記念誌／越来小学校百周年記念誌編集部［編］沖縄市立越来小学校，［1991］　376.2-OK

23．沖縄県高等学校長協会40周年記念誌／沖縄県高等学校長協会結成40周年記念誌編集委員会編　沖縄県高等学校長協会，1992.10　376.4-OK

24．全国高等学校総合文化祭・沖縄 復帰20周年記念　第16回全国高等学校総合文化祭沖縄県実行委員会，1993.2　376.4-ZE

25．琉球大学入学記念アルバム　琉球大学生活共同組合，1992.10　377.2-RY

26．ダウン症児に対するオノマトペを利用した補助言語の開発／神園幸郎研究代表，1992.3　378.5-KA

27．環中国海の民俗と文化 1　凱風社，1993.1　382-HI

28．中国江南の民俗文化 日中農耕文化の比較／福田アジオ編　［佐倉］福田アジオ，1992.3　384-FU

29．神々の古層11／比嘉康雄著　ニライ社，1993.3　385-KA

30．屋部のウシヤキ プーミチャーウガーミ　名護博物館，1989.3　385-NA

31．アジアの伝統芸能／本田安次著　錦正社，1992.11　385.7-HO

32．沖縄の民俗芸能　南風原町立中央公民館，1991.3　385.7-OK

33．與湾大親 奄美の豪族伝説　（鹿児島県）宇検村振興育英財団，1992.11　388-SA

34．沖縄の世間話 大城初子と大城茂子の語り／大城初子，大城茂子〔述〕新城真恵編　青弓社，1993.1　388-SH

35．山死して国栄え山死なば村滅ぶ 命身にかきて米軍演習許ちならん：むらを守る恩納村民の闘い／［特殊部隊訓練場建設及び実弾射撃演習反対恩納村実行委員会編］特殊部隊訓練場建設及び実弾射撃演習反対恩納村実行委員会，1990.8　393.9-YA

4類　自然科学

1．サンゴ礁における石灰化速度と二酸化炭素濃度のモニタリング／大森保研究代表，1993.3　450.13-OM

2. 沖縄県の気候表／沖縄気象台業務課調査係那覇　沖縄気象台，1992.3　451.9-OK
3. 琉球弧海溝斜面のビストン・コアの古海洋学的研究／氏家宏研究代表，1992.3　452.15-UJ
4. 琉球列島における完新世地核変動の地域区分および完新世地核変動集中時期の推定／河名俊男研究代表，1992.4　455.4-KA
5. 毒蛇の来た道 大規模海水準変動説／星野通平著　東海大学出版会，1992.11　456.8-HO
6. 南西諸島における野生生物の種の保存に不可欠な条件に関する研究報告書／環境庁自然保護局［編］　環境庁自然保護局，1991.3　462-NA
7. ポケットにいっぱい 身近な自然／大浜貞子著　沖縄時事出版，1992.11　462-OH
8. 熱帯・亜熱帯性資源植物の収集・保存に関する研究／新本光孝研究代表，1990.7　471.9-AR
9. シロアリタケに関する研究／金城一彦研究代表，1992.3　474.8-KI
10. 沖縄・八重山群島の石西礁における現生貝形虫の生態学的・分類学的研究／田吹亮一研究代表，1992.4　483.36-TA
11. ハナヤサイサンゴ共棲生物群集の構造と成立過程の解析／土屋誠研究代表，1992.3　483.36-TS
12. リュウキュウアユの遺伝資源学的研究／諸喜田茂充研究代表，1990.12　487.7-SH
13. Strongyloides venezuelensis を用いた糞線虫感染防御免疫の研究／佐藤良也研究代表，1991.3　493.16-SA
14. Dysoxia による脳障害と活性酸素／湯佐祚子研究代表，1988.9　493.73-YU
15. 患者が待っている 医の本質を見つめて／馬場省二著　朝日新聞社，1992.12　498.04-BA
16. 道芝の響き その日・その時　折々の断層／山城永盛著　沖縄県厚生事業協会，1992.6　498.04-YA
17. 沖縄発爽やか長寿の秘訣／松崎俊久編著　学苑社，1993.1　498.38-MA
18. 沖縄における住民の食行動と成人病との関わりに関する研究／宮城節子研究代表，1990.12　498.53-MI

5類　技　　術

1. 地すべり対策と二次災害の危険防止に必要な残留強度に関する研究／宜保清一研究代表，1991.3　511.34-GI
2. 南部国道20年のあゆみ みち・人・ふれあい・・・・・／沖縄開発庁沖縄総合事務局南部国道事務所編　沖縄開発庁沖縄総合事務局南部国道事務所，1993.3　514-OK
3. アジア型まちづくりの仕組みと継承に関する国際比較研究／池田孝之研究代表，1990.3　518.8-IK
4. 甦る首里城／沖縄銀行編　沖縄銀行，[1992]　526.2-OK
5. 台風状況下におけるがいしの塩分付着特性と絶縁性能に関する研究／東盛良夫著，1993.3　544.13-HI
6. 沖縄12か月のおかず224品／西大八重子著　沖縄出版，1993.1　596-NI

6類　産　　業

1. 南西諸島における農地相続慣行と農地の所有構造に関する研究／仲地宗俊研究代表，1989.3　611.2-NA
2. 日本植物病理学会土壌伝染病談話会講演要旨集　［日本植物病理学会］，1990　613.56-NI
3. ハイブリッドライスの光合成能力に関する研究／村山盛一研究代表，1990.3　616.2-MU
4. 超大量増殖がウリミバエの配偶行動に及ぼす影響／岩橋統研究代表，1989.10　626.17-IW
5. 細胞キメラ利用による栄養繁殖性ネギ類の育種に関する研究／安谷屋信一研究代表，1993.3　626.54-AD
6. 沖縄～北海道花き類リレー栽培調査研究報告書／南西地域産業活性化センター編　南西地域産業活性化センター，1992.3　627.15-NA
7. 亜熱帯性マメ科潅木ギンネムの飼料資源としての特性解明と有効成分の利用に関する研究／本郷富士弥研究代表，1992.3　643-HO
8. マングローブを中心とした生態系の解明に関する研究 科学技術庁科学技術振興調整費による生活・地域流動研究／國府田佳弘編，1992.5　652-KO
9. 北緯28度の森 湯湾岳・奄美大島　（鹿児島県）宇検村振興育英財団，1992.11　652-MU

10. マングローブ生態系のシステム解析に関する研究／中須賀常雄研究代表，1992.3　652-NA
11. 沖縄の緑と自然 第44回全国植樹祭記念誌 第44回全国植樹祭沖縄県実行委員会，1993.3　652-OK
12. 沖縄県植樹祭開催実績誌／沖縄県緑化推進委員会編　沖縄県農林水産部林務課，1993.2　653-OK
13. 沖縄産マングローブ構成樹種の組織培養に関する基礎的研究／馬場繁幸研究代表，1993.3　653.1-BA
14. 現代マーケティング卒業記念研究誌／沖縄国際大学マーケティング・ゼミナール編　沖縄国際大学新城俊雄ゼミナール，1993.3　675-GE
15. 沖縄地域総合交通史研究／上間清研究代表，1993.4　682-UE
16. 島嶼型リゾートにおける地域収容力 沖縄のリゾート開発と社会・経済を背景として／小濱哲研究代表，1992.4　688-KO
17. おきなわの郵政 守礼の心を守りつづける／沖縄郵政管理事務所編　沖縄郵政管理事務所，[1993]　693.2-OK

7類　芸　　術

1. 特別展沖縄の雅び 琉球王朝の美／名古屋城美術展開催実行委員会編　名古屋城美術展開催実行委員会，1991.10　706.9-NA
2. 平良市の文化財／平良市教育委員会編　平良市教育委員会，1992.3　709.2-H76
3. SHISA ふしぎなシーサー／スーザン・アルブライト文と絵，砂川茂日本文　沖縄コロニー印刷，C1992　726.7-AL
4. 書を初めて習う人のために 書法真訣／謝花雲石録，沖縄県立博物館編　沖縄県立博物館友の会，1993.2　728-JA
5. 謝花雲石／沖縄県立博物館編　沖縄県立博物館友の会，1993.2　728-JA
6. 秋成と幻の華アダン 春雨梅花歌文巻／鷲山樹心著　和泉書院，1992.11　729.1-WA
7. 沖縄復帰と文化の歩み 沖縄返還20周年記念集／伊集盛彦写真 野口武徳文　日本報道記者会，1992.3　748-OK
8. 陶 The best selections of contemporary ceramics in Japan　京都書院，1992.11　751-OM
9. 喜名焼古窯跡展 発掘調査のあらまし　読谷村教育委員会文化振興課，1993.3　751.3-YO
10. 花咲く布琉球紅型 城間栄喜作品集／城間栄喜［作］　日本放送出版協会，1993.1　753-SH
11. 絣／長崎巌著　小学館，1993.4　753.3-NA
12. 大城志津子図案集 技と美／沖縄県立博物館編　石垣市立八重山博物館，1991.3　753.3-OK
13. 能と組踊比較鑑賞会 文化の海流を見る芸能学会，1991.11　773-NO
14. 沖縄のライフル射撃競技 20年の歩み／沖ラ射協資料編集委員会編　沖縄県ライフル射撃協会，1992.9　789.7-OK
15. 琉球歌加留多（りゅうきゅううたがるた）／大城勇気企画・編纂　ねゐてぃぶ，1992.11　797-RY

9類　文　　学

1. 波上琉歌集／波上琉歌会編　波上琉歌会，1992.11　913-NA
2. 春を呼ぶ 仲程喜美枝第1歌集／仲程喜美枝著　六法出版社，1992.9　915-NA
3. 名護の浦 嶋袋全幸歌碑建立記念誌　嶋袋全幸歌碑建立期成会，1993.4　915-SH
4. 首里 詩集／堀場清子著　いしゅたる社，1992.11　917-HO
5. 砂あらし 芝憲子詩集／芝憲子著　青磁社，1992.12　917-SH
6. 風景論／矢口哲男著　矢立出版，1993.10　917-YA
7. 琉球の風 Dragon Spirit NHK大河ドラマ・ストーリー／山田信夫脚本，陳舜臣原作　日本放送出版協会，1993.1　920-CH
8. 沖縄 日本軍最期の決戦　新人物往来社，1992.5　950-OK

注）各資料末尾の記号は請求記号です。

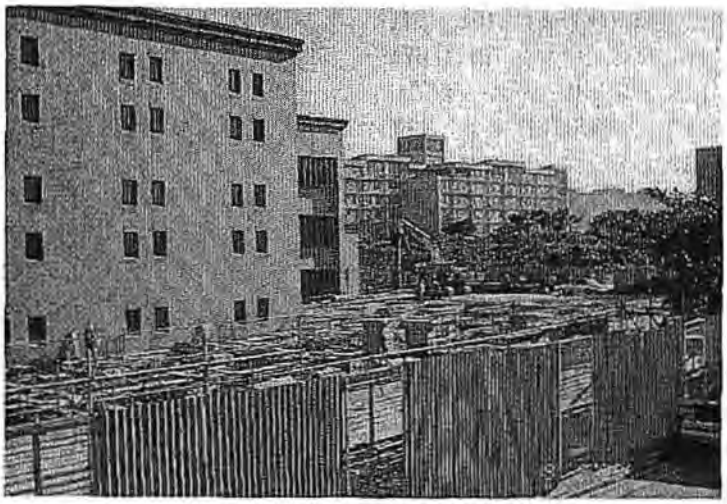
現附属図書館・カウンター風景

お　し　ら　せ

◎ 附属図書館の増築工事始まる

これまで長年にわたって要望してきた附属図書館の増築が認められ、7月15日から工事が始まっています。現在の建物に接して、生協側への増築で、工期は平成6年2月28日までの予定です。

利用者の皆さんには、工事期間中、騒音、振動の発生のほか、一部資料の利用制限を伴うことがあり、何かとご迷惑をおかけしますが、ご了承下さい。



図書館増築現場

本学教官著作寄贈図書案内

1993年4月～1993年7月

垣花　豊順（法文学部）
刑事訴訟法／内田文昭［ほか］共著　青林書院，1993.4
著者：河上和雄，垣花豊順，長井圓，安冨潔
327.6-UC

大森　保（理学部）
サンゴ礁における石灰化速度と二酸化炭素濃度のモニタリング／大森保研究代表［大森保］，1993.4
平成4年度科学研究費補助金（一般研究B）研究報告書　K450.13-OM

山里　清（理学部）
久米島の内湾性サンゴ礁群集／山里清，香村真徳，日高道雄著［琉球大学］，［1980］文部省特別研究・環境科学琉球列島・1980瀬底臨海実験所業績No49抜刷：p133-144
K483.36-YA

上間　清（工学部）
沖縄地域総合交通史研究／上間清研究代表［上間清］，1993.4
平成4年度科学研究費補助金（一般研究C）研究報告書　K682-UE

東盛　良夫（工学部）
台風状況下におけるがいしの塩分付着特性と絶縁性能に関する研究／東盛良夫著［東盛良夫］，1993.3　K544.13-HI

馬場　繁幸（農学部）
沖縄産マングローブ構成樹種の組織培養に関する基礎的研究／馬場繁幸研究代表［馬場繁幸］，1993.3
平成4年度科学研究費補助金（一般研究C）研究報告書　K653.1-BA

中原　俊明（短期大学部）
社会の国際化と人権を語る　Ⅲ　／法務省人権擁護局編　法務省人権擁護局，1993.3
講演：手塚和彰，黒田清，中原俊明
316.1-HO

平良　辰夫（短期大学部）
Episodic organization and call : a progmatic approach／by Tatsuo Taira. -- University of New Mexico, 1992
Facsim. Author's thesis (Ph.D) -- University of New Mexico, 1992　830.7-TA

注）各資料末尾の記号は請求記号です。

図書館事情

［会　議］

◎　図書館運営委員会

第200回　平成5年7月14日（水）

協議事項

(1)「琉球大学の現状と課題（仮称）」に対する回答について

(2) 附属図書館における自己点検・評価項目について

(3) その他

報告事項

(1) 第40回国立大学図書館協議会総会について

(2) その他

医学部分館だより

[会　議]

◎　第４１回九州地区医学図書館協議会総会が九州歯科大学附属図書館の当番で下記のとおり開催され、医学部分館から分館長、専門員、整理係長が出席しました。

日時：平成5年8月27日（金）14:00～

会場：九州歯科大学別館２Ｆ会議室

協議題：

1．日本医学図書館協会理事の選出について

2．日本医学図書館協会評議員（館）について

3．来年度地区セミナー担当館について

4．ＪＭＬＡ名誉顧問の推戴について

5．来年度当番館について

報告事項：

1．第４回九州地区医学図書館員セミナーについて（熊本大学）

パネルディスカッション：

現状を踏まえて将来を展望する

－これからの医学系図書館－

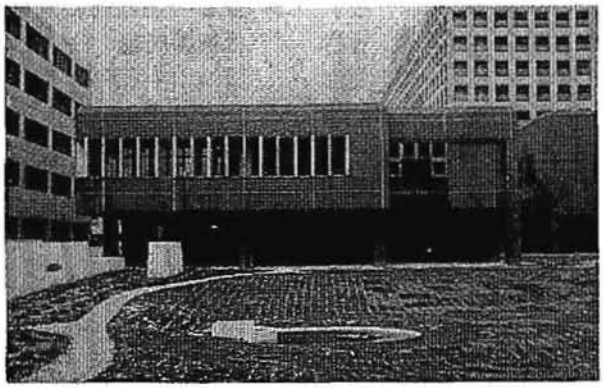
パネリスト　副島館長（福岡歯科大学）

中村名誉顧問

松下分館長（鹿児島大学）

コーディネーター

朝倉専門員（九州大学）



医学部分館

編集後記

100号記念号の出版企画にあたり、砂川学長はじめ歴代の図書館長及び先輩諸兄姉に寄稿をお願いしましたところ、快くお引き受けいただき、このように立派な記念号を出版できましたことを、編集委員一同心から感謝申し上げます。寄稿の掲載は、図書館現場の職員、これをとりまく管理職、館長の順とし、図書館の歴史と今後の課題が浮き彫りにされるような構成としました。

1967年の創刊以来、四半世紀を経て100号を迎えたのを一つの節目として、次号（Vol.27 No.1, 1994年1月刊行予定）からＡ４判化し、点検・評価を重ねてよりよき広報誌を目指していきますので、今後ともご支援のほど、よろしくお願いいたします。　(T. S.)

琉球大学附属図書館報“びぶりお”第26巻　第3号（通巻第100号）
平成5年9月30日発行
発行　琉球大学附属図書館　〒903-01　沖縄県中頭郡西原町千原１番地
電話　098(895)2221　内線（2143）　編集　びぶりお編集委員会